

## [個別論文]

# 中高一貫校の校内相談室へのニーズ調査の利用法

—実際の相談室活動と校内相談室への相談ニーズとを比較して—

小倉正義\*・平石賢二\*\*

### 【問題と目的】

#### 【調査1】

結果と考察

#### 【調査2】

結果と考察

#### 【総合考察】

付記

文献

## 【問題と目的】

近年、いじめや不登校の問題が深刻化し、平成7年度から配置され始めたスクールカウンセラーに再び注目が集まっている。そのような時代の背景の中で、中学校や高等学校において、スクールカウンセラーのような専門的なヘルパーが校内に存在することは、めずらしいことではなくなってきた。専門的なヘルパーとは、心理教育的援助サービスを主たる仕事として専門的に行うものことである(石隈、1999)。中学校や高等学校では、スクールカウンセラーや心の教室相談員などの専門的なヘルパー以外にも、担任教師、教科担当教師、養護教諭、保護者、友だちなど生徒を援助するさまざまなヘルパーが存在するが(水野・石隈・田村、2003；山口・水野・石隈、2004)、本研究では専門的なヘルパーに注目する。

これまで筆者らは、A大学附属中学・高等学校での教育相談に関わってきた。A大学附属中学・高等学校(以下、A校とする)では、平成9年9月から校内相談室が設置され、これまで相談活動を行ってきた。この校内相談室の相談員は、A大学の大学院で臨床心理学を専攻している学生で構成されている。大学院では、臨床心理士養成のためのコースに所属して研修を受けている。以上のように、相談活動を主な業務としており、専門知識も有していることから、A校の校内相談室の相

\* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程学生

\*\* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授

談員は専門的なヘルパーであるということができよう。校内相談室の開室時間は平日の午後3時から午後5時までで、その時間は1人ないし2人の相談員が部屋にいるようになっている。相談の形態としては、生徒からの予約に基づいて指定された日時に1対1で行う相談に加えて、何人かが集団でやってきて思い思いに時間を過ごすという2通りの利用方法がある。予約相談については、何かを相談したいという明確な相談ニーズをもっていると考えられるが、自由来室をする生徒に関しても、半田（2000）によってその有効性が指摘されていることからわかるように、何らかの援助ニーズを抱えていると考えられる。このような形態をもつ校内相談室について検討することで、スクールカウンセリングの方法論への貢献ができるだろう。

ところで、スクールカウンセリングにおいて大切とされるアセスメントは、問題となっている個人の心理査定以外にもさまざまな側面があり、生徒がどのような悩みを抱え、カウンセラーに対してどのような援助を求めているかといった援助ニーズの調査を含んでいる。ニーズ調査は、スクールカウンセリングの年次計画を立てるうえでの出発点に位置づけられ、プログラムの目標設定に必要な情報を得るうえで重要視されている（Snyder, 2000）。わが国でも石隈・小野瀬（1997）が中学生・高校生を対象にスクールカウンセラーへのニーズ調査を行い、スクールカウンセリングに求められる役割について考察している。このことは、スクールカウンセラーのニーズ調査だけでなく、校内相談室へのニーズ調査においてもあてはまることである。このことから、校内相談室へのニーズ調査が学校全体の精神保健、校内相談室の運営について思案するうえで非常に重要なものであると考えられる。しかしながら、ニーズ調査の重要性は指摘されながらも、具体的にどのようにニーズ調査を実践に活かしていくかについて示された研究は少ない。筆者らは、教師へのニーズ調査の結果から、調査をどのように実践に活かすのかについて考察しているが（平石・田中・上杉・駒井、2004）、生徒へのニーズ調査についてはこれまで検討してこなかった。

そこで、本研究では、実際の来室件数・利用方法・相談内容（調査1）と生徒への校内相談室へのニーズ調査（調査2）の結果を比較することで、校内相談室へのニーズ調査を実践に活かす方法について検討することを目的とする。

## 【調査1】

### 目的

ニーズ調査を行った時期と同時期である2004年5月から10月の校内相談室への来室件数、利用方法、相談内容を整理し、A校の校内相談室の機能について考察することを目的とする。

### 方法

2004年5月から10月の校内相談室への来室件数を、相談内容が記録されているノートを見ながら整理した。整理をする際、利用方法に関しては、①相談、②雑談・描画、③情報希求、④その他に分類した。③の情報希求に関しては、A校の特徴的な授業の質問のことを意味している。授業内容に関する質問であるので、①の相談とは区別して分類した。また、④のその他は①、②、③に分類できなかったものを示している。

## 【結果と考察】

**校内相談室への来室件数と利用方法** 2004年5月から10月の校内相談室への来室件数について整理した結果、中学生男子は3件、中学生女子は1件、高校生男子は26件、高校生女子は131件であった。このことから、中学生はほとんど校内相談室に来室していないこと、高校生においても女子の方が男子よりもはるかに来室していることが明らかになった。

また、校内相談室の利用方法について整理した結果（表1）、①相談が15件、②雑談・描画が112件、③情報希求が21件、④その他が7件であった。また、①相談の中で、同性の友人とのことが10件、異性の友人とのことが2件、進路のことが3件であった。このことから、来室する生徒のほとんどが、雑談・描画の場として校内相談室を利用していることが明らかになった。しかし、雑談・

表1 2004年5月から10月の相談内容・件数

相談	同性の友人とのこと	10
	異性の友人とのこと	2
	進路のこと	3
雑談・描画		112
情報希求		21
その他		7

描画の中でも友人関係に関する愚痴や悩みなどが多く語られていた。

以上のことから、A校の校内相談室は、①利用している生徒に偏りがあること、②雑談・描画という場を提供しながら、生徒の援助ニーズに対応していることが示唆された。

## 【調査2】

### 目的

校内相談室への相談ニーズに関するニーズ調査から、A校の校内相談室への相談ニーズの特徴や校内相談室の機能について考察することを目的とする。

### 方法

**調査時期** 2004年10月中旬

**調査対象** 中高一貫校（一部、高校時編入）であるA校の中学生233名（男115人、女118人）、高校生326名（男149人、女177人）を対象に質問紙調査を実施した。

**手続き** 各担任により配布され、一斉方式で実施された。

**調査内容** ① 校内相談室への来室意欲…「今年度になってから、相談室に行ってみたく思ったことがありましたか？」という問いに対し、「はい」・「いいえ」の2件法で回答を求めた。

② 来室行動…「今年度になってから、相談室に行ったことがありますか」という問いに対し、「はい」・「いいえ」の2件法で評定を求めた。

③ 校内相談室で相談したい内容とその程度…「母親とのこと」「父親とのこと」「きよ

うだいとのこと」「祖父母とのこと」「同性の友だちとのこと」「異性の友だちのこと」「勉強・成績のこと」「先生のこと」「部活・サークルのこと」「身体の調子のこと」「こころの調子のこと」「性に関すること」「自分自身の性格のこと」「将来のこと」の14項目に関して、それぞれの内容を校内相談室で相談したいと思うかどうかを、「全く相談したくない（1点）」～「とても相談したい（5点）」までの5段階評定で回答を求めた。

④ 適応感…水野・石隈・田村（2003）の適応尺度を一部修正した尺度を使用した。下位尺度は学習（7項目、7～35点）、社会（4項目、4～20点）、進路（5項目、5～25点）、健康（6項目、6～30点）、心理（10項目、10～50点）の5つの側面から成る。回答形式は、各々の項目に対して、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」までの5段階で評定を求めた。得点が高い程適応的であることを示している。

## 【結果と考察】

**性差について** 校内相談室で相談したい内容とその程度に性差がみられるかどうか明らかにするために、それぞれの項目について  $t$  検定を行った。その結果、「母親とのこと」「父親とのこと」「同性の友だちのこと」「勉強・成績のこと」「部活・サークルのこと」「こころの調子のこと」「自分自身の性格のこと」「将来の進路のこと」の8項目において、男性より女性のほうが校内相談室への相談ニーズが有意に高かった（「母親とのこと」 $t(551.7) = 2.56, p < .05$ ；「父親とのこと」 $t(546.9) = 2.13, p < .05$ ；「同性の友だちのこと」 $t(544) = 4.27, p < .001$ ；「勉強・成績のこと」 $t(552) = 2.27, p < .05$ ；「部活・サークルのこと」 $t(546) = 2.06, p < .05$ ；「こころの調子のこと」 $t(551.1) = 3.06, p < .01$ ；「自分自身の性格のこと」 $t(552) = 2.80, p < .01$ ；「将来の進路のこと」 $t(553) = 2.35, p < .05$ ）。また、それぞれの項目を合計した校内相談室への相談ニーズについて、性差がみられるかどうかを明らかにするために  $t$  検定を行った。その結果、男性よりも女性のほうが有意に高かった（ $t(501) = 1.98, p < .05$ ）。それぞれの項目、項目の合計の男女別の平均値と標準偏差、 $t$  検定の結果を表2に示した。

これらの結果から、ほとんどの項目において男性より女性のほうが、相談員へのニーズがあると考えられた。Fisher & Farina（1995）は、女性の方が男性よりも心理的問題で援助を受けることに肯定的な態度を示すことを指摘している。本研究の結果から、このような女性の特性が中学生・高校生の女子でもみられることが確認されたといえるだろう。

**学校段階による差について** 校内相談室に相談したい内容とその程度に中学校・高校の学校段階による差がみられるかどうかを明らかにするために、それぞれの項目について  $t$  検定を行った。その結果、「部活・サークルのこと」で高校生よりも中学生が有意に高く（ $t(440.1) = 2.43, p < .05$ ）、「性に関すること」で中学生よりも高校生が有意に高かった（ $t(530) = 1.71, p < .10$ ）。また、校内相談室への相談ニーズ全体について、学年段階による差がみられるかどうかを明らかにするために  $t$  検定を行った。その結果、有意な差はみられなかった（ $t(501) = 0.32, n.s.$ ）。それぞれの項目、項目の合計の学年段階別の平均値と標準偏差、 $t$  検定の結果を表3に示した。

このことから、全体的に中学生と高校生との間で、校内相談室への相談ニーズに違いが見られな

いことが示唆された。ただし、項目別に見ていくと、「部活・サークルのこと」では高校生よりも中学生のほうが、「性に関すること」では中学生よりも高校生のほうが校内相談室へのニーズがあることが明らかにされた。相談したい悩みの内容が中学生と高校生では、若干違う可能性が示唆された。

**来室意欲×来室行動によるタイプによる差について** 校内相談室への来室意欲と相談行動の回答により、調査対象者を4群に分類した。その4群とは、相談に行きたくて、行っている群（以下、A群：59人）、相談に行きたいけど、行けない群（以下、B群：21人）、相談に行ってみたいわけではないが、行っている群（以下、C群：8人）、相談に行ってみたいわけでもなく、行っていない群（以下、D群：460人）である。そして、それぞれの群において、校内相談室への相談ニーズの平均値を求めた。その結果、A・B・C群では、母親のこと（A2.9点、B3.0点、C2.5点）、父親のこと（A2.6点、B2.9点、C2.1点）、きょうだいのこと（A2.4点、B2.9点、C1.9点）の順に高く、D群では、勉強、成績のこと（2.0点）、将来のこと（1.9点）、自分自身の性格のこと（1.8点）の順で高かった。群ごとに、校内相談室への相談ニーズのそれぞれの項目の平均値と標準偏差を表4に示した。

この結果から、校内相談室への来室意欲があつたり実際に相談室に来室したりしている生徒は、家族のことを主に相談したいと思っていることが示唆された。それに対して、校内相談室への来室意欲も校内相談室に来たこともない生徒は、進路や勉強のことについて主に相談したいと思っていると考えられた。これらのことから、校内相談室への来室意欲と相談行動の類型によって、校内相談室で相談したい悩みの種類が違うことが予想される。小野寺・石隈（1997）の調査では、「家庭の悩み」については中学生・高校生おいても誰にも相談しないという生徒が多いとされている。このことから、実際に家庭の悩みがある場合には、誰にも相談できないから相談員に相談したいと思い、それが来室意欲や来室行動につながっていると考えられる。

**校内相談室へのニーズと適応感の関連について** 校内相談室への相談ニーズと適応感の関連を調べるために、校内相談室への相談ニーズの合計と適応感の下位尺度である学習、社会、進路、健康、心理との相関を求めた。その結果、校内相談室への相談ニーズとの相関に関して、適応感の進路との間で有意な正の相関が、適応感の健康、心理との間で有意な負の相関がみられた（「適応（進路）」 $r = .12, p < .01$ ；「適応（健康）」 $r = -.17, p < .001$ ；「適応（心理）」 $r = -.26, p < .001$ ）。校内相談室へのニーズと適応感との相関表を表4に示した。

このことから、進路面、健康面、心理面での適応と校内相談室への相談ニーズに関連があることが明らかになった。進路面に関しては正の相関があり、適応的な生徒のほうが校内相談室への相談ニーズが高いと思われた。このことは、進路面で適応できている生徒であるほど進路面で具体的に相談したいと思うことを示している可能性もあるが、相関が低い値なのではっきりとしたことはいえない。また、健康面・心理面に関しては負の相関がみられ、健康面・心理面で不適応な生徒であるほど校内相談室への相談ニーズが高いことが示唆された。健康面・心理面の適応感については項目の内容を見ても、専門的な援助が必要と考えられるような項目が多い。このことから、健康面・心理面での不適応を示す生徒は、専門的ヘルパーである校内相談室の相談員に援助を求める傾向にあると思われる。

表2 校内相談室への相談ニーズの平均値とSD (性別による *t* 検定結果)

	男性			女性		<i>t</i> 値
	平均値	(SD)		平均値	(SD)	
母親とのこと	1.49	(0.82)	<	1.69	(0.94)	2.56*
父親とのこと	1.47	(0.78)	<	1.62	(0.90)	2.13*
きょうだいとのこと	1.46	(0.78)		1.58	(0.89)	1.58
祖父母とのこと	1.45	(0.75)		1.55	(0.82)	1.58
同性の友だちとのこと	1.67	(0.99)	<	2.07	(1.21)	4.27***
異性の友だちとのこと	1.72	(1.01)		1.81	(1.06)	0.93
勉強・成績のこと	1.98	(1.25)	<	2.23	(1.27)	2.27*
先生のこと	1.59	(0.89)		1.70	(0.95)	1.49
部活・サークルのこと	1.69	(1.07)	<	1.89	(1.13)	2.06*
身体の調子のこと	1.57	(0.86)		1.66	(0.96)	1.23
こころの調子のこと	1.72	(1.05)	<	2.02	(1.24)	3.06**
性に関すること	1.64	(1.00)		1.60	(0.89)	0.42
自分自身の性格のこと	1.76	(1.08)	<	2.03	(1.21)	2.80**
将来のこと	1.98	(1.28)	<	2.23	(1.26)	2.35*
合計	23.50	(11.51)	<	25.55	(11.72)	1.98*

\**p* < .05, \*\**p* < .01, \*\*\**p* < .001表3 校内相談室への相談ニーズの平均値とSD (学校段階による *t* 検定結果)

	中学生			高校生		<i>t</i> 値
	平均値	(SD)		平均値	(SD)	
母親とのこと	1.57	(0.84)		1.63	(0.96)	0.69
父親とのこと	1.57	(0.85)		1.52	(0.86)	0.62
きょうだいとのこと	1.56	(0.86)		1.47	(0.81)	1.21
祖父母とのこと	1.53	(0.81)		1.46	(0.76)	0.96
同性の友だちとのこと	1.83	(1.08)		1.96	(1.20)	1.31
異性の友だちとのこと	1.80	(1.07)		1.74	(1.00)	0.70
勉強・成績のこと	2.06	(1.22)		2.20	(1.34)	1.32
先生のこと	1.69	(0.94)		1.58	(0.89)	1.36
部活・サークルのこと	1.70	(1.02)	<	1.94	(1.21)	2.43*
身体の調子のこと	1.60	(0.89)		1.64	(0.96)	0.54
こころの調子のこと	1.89	(1.17)		1.87	(1.16)	0.21
性に関すること	1.67	(0.99)	>	1.54	(0.86)	1.71 †
自分自身の性格のこと	1.94	(1.18)		1.87	(1.13)	0.71
将来のこと	2.11	(1.28)		2.13	(1.28)	0.22
合計	24.46	(11.75)		24.80	(11.52)	0.32

† *p* < .10 \**p* < .05.

表4 来室意欲×来室行動による群別の校内相談室への相談ニーズの平均値とSD

A群	B群		C群		D群		
	平均値 (SD)		平均値 (SD)		平均値 (SD)	平均値 (SD)	
母親とのこと	2.90 (1.30)	母親とのこと	3.03 (1.26)	母親とのこと	2.50 (1.31)	勉強、成績のこと	1.96 (1.21)
父親とのこと	2.62 (1.32)	父親とのこと	2.93 (1.34)	父親とのこと	2.13 (1.25)	将来の進路のこと	1.94 (1.20)
きょうだいとのこと	2.38 (1.32)	きょうだいとのこと	2.90 (1.37)	きょうだいとのこと	1.88 (0.99)	自分自身の性格のこと	1.78 (1.10)
祖父母とのこと	2.38 (1.28)	祖父母とのこと	2.88 (1.34)	祖父母とのこと	1.63 (0.92)	同性の友だちとのこと	1.74 (1.03)
同性の友だちとのこと	2.38 (1.20)	同性の友だちとのこと	2.66 (1.27)	同性の友だちとのこと	1.63 (0.92)	心の状態のこと	1.71 (1.04)
異性の友だちとのこと	2.29 (1.15)	異性の友だちとのこと	2.47 (1.39)	異性の友だちとのこと	1.63 (0.92)	部活・サークルのこと	1.69 (1.02)
勉強、成績のこと	2.24 (1.34)	勉強、成績のこと	2.37 (1.16)	勉強、成績のこと	1.63 (0.92)	異性の友だちとのこと	1.68 (0.98)
先生とのこと	2.14 (1.24)	先生とのこと	2.22 (1.12)	先生とのこと	1.63 (0.92)	先生とのこと	1.56 (0.86)
部活・サークルのこと	1.95 (1.02)	部活・サークルのこと	2.20 (1.09)	部活・サークルのこと	1.38 (0.74)	身体の調子のこと	1.52 (0.83)
身体の調子のこと	1.86 (1.01)	身体の調子のこと	2.20 (1.22)	身体の調子のこと	1.38 (0.74)	性に関すること	1.51 (0.85)
心の状態のこと	1.81 (0.93)	心の状態のこと	2.18 (1.17)	心の状態のこと	1.38 (0.74)	母親とのこと	1.50 (0.81)
性に関すること	1.81 (0.93)	性に関すること	2.18 (1.19)	性に関すること	1.38 (0.74)	きょうだいとのこと	1.46 (0.80)
自分自身の性格のこと	1.76 (0.89)	自分自身の性格のこと	1.85 (1.00)	自分自身の性格のこと	1.38 (0.74)	父親とのこと	1.46 (0.76)
将来の進路のこと	1.75 (0.91)	将来の進路のこと	1.82 (0.98)	将来の進路のこと	1.38 (0.74)	祖父母とのこと	1.45 (0.74)

表5 校内相談室へのニーズと適応感との相関 (Pearson)

	1	2	3	4	5
1 相談員へのニーズ					
2 適応 (学習)	.04				
3 適応 (社会)	.05	.28***			
4 適応 (進路)	.12**	.47***	.31***		
5 適応 (健康)	-.17***	.16***	.19***	.13**	
6 適応 (心理)	-.26***	.16***	.18***	.10*	.63***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

## 【総合考察】

これまで調査1・調査2の結果から、考察できることをまとめてきた。調査1・調査2それぞれから得られた知見を考慮にいたうえで、実践につなげていくことは重要である。しかしながら、それだけではニーズ調査である調査2を実践に活かす方法について十分に示されているとはいえない。調査1と調査2の結果を比較することで、ニーズ調査を具体的に実践につなげていく方法について検討したい。

まず、調査1から実際の来室件数は高校女子が圧倒的に多いことが明らかになったが、調査2の結果では相談ニーズに性差はみられるものの、高校生と中学生の間では有意な差は得られなかった。このことから、中学生にも相談ニーズがあるにもかかわらず、来室できていない可能性があると考えられた。来室行動がみられないのは相談ニーズがないからではなく、何らかの要因で来室行動ができなくなっているのだろう。A校の校内相談室において、相談ニーズのある中学生が来室しやすいような環境整備や広報活動をする必要性があることが示唆された。

次に、調査1の結果から実際に相談された内容は、友人関係や進路に関する内容であったが、調査2の結果からは来室意欲や来室行動のある生徒の相談ニーズとして上位にあがっているものが家族のことが中心であった。このことから、来室した生徒の中で家族のことにについて相談したいという気持ちがあったにもかかわらず、相談できていない生徒がいる可能性が示唆された。校内相談室に来室する生徒が、家庭や家族に関する悩みを抱えている可能性を考慮しておく必要があると思われた。

このように、実際の来室件数、利用方法、相談内容からは得ることのできない情報が、ニーズ調査をすることで得ることができることが明らかになった。そして、ニーズ調査だけを考えるのではなく、実践から得られたデータと比較し検討することで、校内相談室の運営を考えるうえで重要な情報を得ることができることも示されたといえよう。平石ら(2004)では、ニーズ調査と相談室活動を対応させていなかったが、本研究では、ニーズ調査と校内相談室の活動を対応させて論じることができた点に、独自性があると思われる。

最後に今後の課題を述べる。第一に、調査対象校が一校であったことが挙げられる。今後、調査対象校を増やすことで、ニーズ調査の校内相談室の運営への活用法が精選されると思われる。第二に、専門的ヘルパーとして校内相談室の相談員がどのような位置づけにあるかが明らかにされなかった点があげられる。この点に関しては、2005年からA校にスクールカウンセラーが配置されているため、今後スクールカウンセラーへのニーズとの比較をしていくことで、校内相談室の独自の機能について検討することができるだろう。第三に、学級の風土や学校の風土などを考慮に入れない点があげられる。学級風土は子どものメンタルヘルスと関係することが明らかにされている(伊藤・松井、1998)。今後、学級の風土や学校の風土を考慮することが望まれる。

以上のような課題に取り組んでいくことで、校内相談室の運営だけでなく教育相談活動全体にとって意味のあるニーズ調査を実施することが可能になるだろう。



## 【付記】

本研究は、日本青年心理学会第13回大会において発表されたものを修正し、再分析したものである。本調査を実施するに当たってご協力いただいた教員の皆様、また協力してくださった生徒の皆様深く感謝を申し上げます。

## 【文献】

- Fisher, E.H., & Farina, A. 1995 Attitudes toward seeking professional psychological help : A shortend form and considerations for research. *Journal of College Student Development*, 36, 368-373.
- 平田一郎 2000 学校における開かれたグループによる援助—自由来室活動による子どもへの直接的援助— *カウンセリング研究*, 33, 265-275.
- 平石賢二・田中伸明・駒井恵里子・上杉春香 2004 教師のスクールカウンセリングに対するニーズに関する調査—校内相談室に対する評価と期待、心の専門家に対する期待、教師の抱える悩みの観点から— *名古屋大学大学院教育発達科学研究科中等教育研究センター紀要* 4, 111-125.
- 伊藤亜矢子・松井仁 1998 学級風土研究の意義 *コミュニティ心理学研究*, 2, 56-66.
- 石隈利紀 1999 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス.
- 石隈利紀・小野瀬雅人 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究—子供・教師・保護者を対象としたニーズ調査の結果より— *文部科学省補助金研究成果報告書、基盤研究(C)(2) 06610095*.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 2003 中学生を取り巻くヘルパーからのソーシャルサポートと適応に関する研究 *コミュニティ心理学研究*, 7, 35-46.
- Snyder, B.A. 2000 Managing an elementary school developmental counseling program : The role of the counselor. In J.Wittmer (Ed.), *Managing your school counseling program : K-12 developmental strategies*. Minneapolis : Educational Media Corporation. Pp.37-48.
- 山口豊一・水野治久・石隈利紀 中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連—学校心理学の視点を生かした実践のために— *カウンセリング研究*, 37, 241-249.

# Study for Needs Survey to Counseling Room in Junior High and High school

Masayoshi Ogura\*and Kenji Hiraishi\*\*

Assessment is one of the important roles in school counseling activity. One of the methods for assessment is to survey on students' needs. The purpose of this study is to discuss how to use a counseling room by investigating needs that junior high and high school student have and the possibility of needs survey.

This study consists of study1 and study2. Study1 was to investigate how to use the counseling room in school A by using data of actual school counseling activity. Suvey2 was to investigate what needs students have in school A. Compared the result of Study1 with the result of Study2. ① General improvement and information about counseling room in junior high and high school is necessary for especially junior high school students. ②Counselor in junior high and high school should take into consideration that Many students who use the counseling room have troubles about their family.

This study suggested that need survey is quite useful in school counseling activity.

---

\* Graduate Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

\*\* Associate Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University